

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | フィンランド国立図書館蔵合巻『仮名手本忠臣蔵』調査報告                                                                                                                                                                                       |
| Sub Title        | Investigating a gōkan book of The treasury of loyal retainers (Kanadehon chūshingura, Finnish National Library collection)                                                                                        |
| Author           | 津田, 真弓(Tsuda, Mayumi)<br>布施, 倫英( Fuse, Rie)<br>小長光, 芳子( )<br>Kenttä, Laura( )<br>Heiskanen, Tetsu( )<br>Repo, Santtu( )                                                                                           |
| Publisher        | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会                                                                                                                                                                                                   |
| Publication year | 2020                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.35 (2020. ), p.221- 244                                                                                                                               |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            |                                                                                                                                                                                                                   |
| Genre            | Departmental Bulletin Paper                                                                                                                                                                                       |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20200630-0221">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20200630-0221</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# フィンランド国立図書館蔵 合巻『仮名手本忠臣蔵』調査報告

津田 眞弓（慶應義塾大学 経済学部 教授）

布施 倫英（ヘルシンキ大学 文学部言語学科 専任講師）

小長光 芳子

（ヘルシンキ大学 文学部フィンランド語と文化専攻 修士課程2年生）

ケンッタ ラウラ Laura Kenttä

（ヘルシンキ大学 社会学部人類学専攻 修士課程1年生）

ヘイスカネン テツ Tetsu Heiskanen

（ヘルシンキ大学 文学部アジア研究専攻 学士課程4年生）

レポ サンットウ Santtu Repo

（ヘルシンキ大学 文学部アジア研究専攻 学士課程4年生）

## はじめに

本稿は、二〇一九年十月九日にフィンランド国立図書館にて行ったワークショップ「フィンランド国立図書館の本でまなぶ和書」（“Suomen kansalliskirjaston japanilainen kokoelma”）に参加したヘルシンキ大学の学生に課した古典籍調査に基づく。彼らのレポートを指導教員の布施倫英（ヘルシンキ大学）と共に加筆修正して、現在残存が少ない本資料『仮名手本忠臣蔵』の調査報告としたい。

なお、津田眞弓が担当したワークショップは、畑有紀氏（名古屋大学大学院人文学研究科研究員）が北欧の大学関係者に直接交渉して実現させた

セミナーの一つ「名古屋大学によるヘルシンキ大学くずし字セミナー」(KIM-AA306 Erikoiskurssi 3/Special Courses 3 *Kuzushi-ji* seminar)の一環である。津田の担当する部分も当初はヘルシンキ大学で開講されるはずだったが、同国立図書館のご厚意で、特別講演室 Monrepos-Sali にて実物を見ながら行うことが許された。

つけ加えると、教材とした合巻の『仮名手本忠臣蔵』（ヤポニカコレクション581）は、同館がまだヘルシンキ大学図書館の一部であった1994年に、テロ・サロマー氏が目録を作成した時点では、半分（各編の下巻）のみ所在が知られていたが、くずし字セミナーを契機に、図書館の別の施設で残りが見つかった。長らく日本語を使える専門の司書がいない状況だけに、こうしたセミナーで、現地の所蔵本を取り上げることの大切さを改めて感じた。本書が古典籍の所蔵がほとんどない同館に至った経緯は未詳だが（付記参照）、絵も豊富で、江戸時代から今に至る人気作としてサムライの国日本を知る一書として選ばれたのではないだろうか。今回のワークショップでも、和本やくずし字に親しむだけでなく、広く日本文化に触れる教材として活躍した。

なお、セミナーの後には図書館の美しいホール Kupolisali で日本コレクションの展示が行われ、当該本も、上下巻で一つの浮世絵となる表紙や細かい彫りがほどこされた紙面で当地の人々を楽しませることになったが〔図1〕、人気があって展示期間が延長となるうち、新型コロナウイルスのため館が長期閉鎖となり、予定されていた本稿のための撮影ができなくなってしまった。これにより、本稿の図版はワークショップのために撮影した鍋島報効会徴古館蔵本（佐賀県立図書館寄託、鍋991-2244）を用いる。この鍋島本は、国文学研究資料館の古典籍総合データベース（2019年10月1日閲覧）よれば、現在存在が知られている唯一の資料である。そして、この本の撮影も予定を昨年日本に大きな被害を出した台風に阻まれたが、当地の村上義明氏が急遽撮影をしてくださり、ワークショップに使用することができた。多くの人々の温かいお心に支えられ本稿をなすことができ



図1 フィンランド国立図書館の  
展示

たことに感謝し、喜びたい。

以下に、本書の書誌と内容につき報告をする。情報や文字に関する凡例は次の通りである。

凡例：

- ・報告に使用する文字は、現在通用の文字にする。
- ・『仮名手本忠臣蔵』の表紙や見返しなどに書かれた文章はそのまま記載するが、ひらがなのみで記されている本文については、

読みやすさのために適宜濁点、句読点を付し、ひらがなを漢字変える。そして、ふりがなにもとの文字を残した。

- ・調査内容は注記のない限り、フィンランド国立図書館蔵本による。
- ・図版は注記のない限り、鍋島報効会徴古館蔵本による。
- ・浄瑠璃本文は、『新編日本古典文学全集』（JapanKnowledge 所収3、底本、寛延元年〈1748〉七行九十九丁大坂初刻本）を参照した。

### 【書誌事項】

以下、合巻『仮名手本忠臣蔵』の書誌情報を、フィンランド国立図書館蔵本に基づき、鍋島報効会徴古館蔵本で補いつつ記す。鍋島本は美本で、袋や見返しなども残るほぼ完本だが、フィンランド本の方が奥目録（巻末の版元による出版広告）の年記が古く、もとの版元の情報である可能性が高い。仮に本書の版元がフィンランド国立図書館本に残るように山田屋庄次郎板とするならば、作者長島主人が書いた序文が成った前年の安政六年に、山田屋からは二代目歌川国貞による歌舞伎の各段を描いた大判の浮世絵シリーズ『仮名手本忠臣蔵』（早稲田大学坪内逍遙博士記念演劇博物館、008-0230）が出版されているので、この関連で制作されたものとも考えられる。

書名：仮名手本忠臣蔵

作者・絵師：長嶋主人 編著，歌川芳虎 画

書型：中本，縦18cm×横11.5cm（鍋島本，17.6cm×11.6cm）

版元：錦橋堂 山田屋庄次郎（鍋島本，錦耕堂）

刊年：文久三年（1863）か（もう少し早い可能性あり）

ジャンル：草双紙

所蔵：フィンランド国立図書館（日本コレクション581），鍋島報効会徴古館（佐賀県立図書館寄託 鍋991-2244）

### ●前編



図2 前編上・下巻表紙

袋：なし。（鍋島本，高輪あたりの海を描いた図。「孟斎画／仮名手本忠臣蔵／前編」）

表紙：摺付表紙。「<sup>かなでほんちゆうしんぐら</sup>仮名手本忠臣蔵前編／<sup>芳虎画</sup>上／下」。意匠は，富士山を前にしたおかると勘平。おかるとは三代目岩井衆三郎，勘平は二代目沢村訥升の似顔絵。天保年間初頭，歌舞伎で三段目に加

えて上演された清元節を使った舞踏「旅路の花髻」によるが，本文に該当する部分はない。〔図2〕

見返し：上下巻ともになし。（鍋島本，上巻「<sup>かなでほんちゆうしんぐら</sup>仮名手本忠臣蔵／<sup>ぜんぺん</sup>前編／<sup>じやう</sup>上のまき之巻」。意匠は大序の兜を収めた唐櫃。いわゆる留守絵である。下巻「<sup>でほん</sup>かな手本ちゆうしん蔵／<sup>ぜん</sup>前ぺん／<sup>まき</sup>下の巻」。意匠は五段目，早野勘平の笠，簀，鉄砲。）

序文：「安政七庚申春 長島主人識」。（1860年）

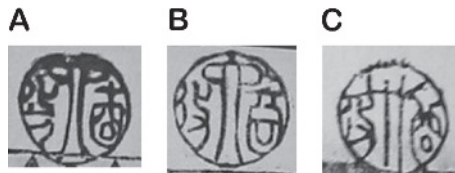


図3 改印，A 前編上巻・B 後編上巻・C 後編下巻



図4 前編口絵

改印：上巻一丁表「酉六改」，文久元年西  
年六月の意，1861年。〔図3〕

柱刻：忠臣。

口絵：上巻一丁裏・二丁表，大序「鶴岡兜  
改」の場面を描く。「相模国八幡宮社内  
に新田左中将義貞并に勇士の討死し  
たる四十七の兜を嘉尾世に見究させる  
図」。〔図4〕

後ろ見返し：上巻なし，下巻「文久三癸亥春開鐫目録」錦橋堂 山田屋庄  
次郎板。

後ろ表紙：青地に白抜き桜模様。

## ●後編



図5 後編上・下巻表紙

袋：なし。（鍋島本，品川あたりの海を描  
いた図。「芳虎画／かな手本忠臣蔵／後  
篇」）

表紙：摺付表紙。「仮名手本忠臣蔵後編／  
芳虎画／上／下」。意匠は，一力茶屋で  
酔い覚ましに涼むおかると，後ろ手に書  
簡を隠す由良之助。おかるとは三代目岩井

糸三郎，由良之助は二代目沢村訥升の似顔絵。〔図5〕

見返し：上下巻ともになし。（鍋島本，上巻「仮名手本忠臣蔵／後編上之  
巻」，意匠は一力茶屋の看板と提灯。下巻「かな手ほん／ちうしんぐら  
／かうへん／下の巻」，意匠は九段目，虚無僧の天蓋〈深い笠〉と尺八。）

序文：なし。一丁表は，義士が残した歌，漢詩，発句で作った貼り交ぜ帖  
を模した意匠。大星由良之助，原郷右衛門，大鷲伝吾，千崎弥五郎，小  
野寺十内，竹森貞七，矢間十太郎。

改印：上巻一丁表「酉六改」。下巻十一丁表「酉六改」か。前編の一箇所，



図6 後編，口絵

後編の二箇所の印影は全てちがっている。  
やや字形がちがうものの、彫り崩しと今  
回は考えた。〔図3〕

柱刻：忠臣二。

口絵：上巻一丁裏・二丁表，七段目，「祇  
園一力茶屋」の場面を描く。大星由良助  
の「祇園町一力屋／揚屋に於て遊興の  
図」。〔図6〕

後ろ見返し：上巻なし，下巻「文久三癸亥春開鐫目録」錦橋堂 山田屋庄  
次郎板。（鍋島本，「文久四甲子年新鐫蔵版目録」，錦耕堂蔵板）〔図7〕

後ろ表紙：青地に白抜きの桜模様。

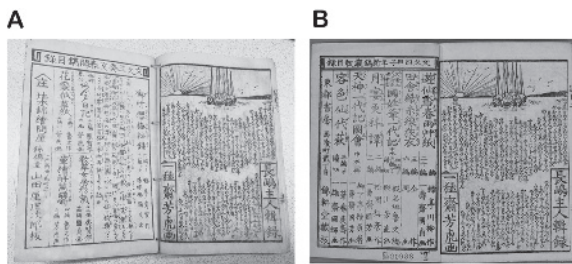


図7 後編下巻奥目録 A フィンランド本・B 鍋島本

## 【内容】

内容については，同一紙面に絵と文が混在する草双紙というジャンルの性質上，場面（見開き二ページ，または一ページ）ごとに，それぞれの絵と文について説明する。

なお，本文は後述の通り，いわゆる忠臣蔵物の起点となった浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』（初演は寛延元年〈1748〉八月，大坂竹本座。二代目竹田出雲・三好松洛・並木千柳）に添いながら，適宜文章や出来事を略しながら綴っている。本文中の絵柄は歌舞伎の舞台を写した雰囲気はあるが似顔絵とは思えない。この点，広く読み物として通用していた浄瑠璃本を用い，一般に親しまれていた歌舞伎のイメージを借りて，わかりやすい梗概本と

して制作されたのだろう。もちろん、講談などの義士伝も視野に入れていることは言うまでもない。

また草双紙というジャンルの特質で、各場面の絵と文章が必ずしも合致していない。例えば、見所の一つ、元禄時代の浅野内匠頭に擬した塩谷判官（『太平記』の登場人物）の切腹は、その場면을絵では前編十二丁裏～十四丁表と二場面分を使って描くが、当外場면을語る文章は十一丁裏・十二丁表に存在し、文章と絵は乖離したまま物語が進行する。一般に草双紙は、読者が最初に全部の絵を見てから文章を音読で読むという方法で享受されたと考えられ<sup>(1)</sup>、特にこの合巻というジャンルにおいて、こうした絵と文の場所のずれは、見せ場となる部分の絵を文章が先導したり、あるいは後についたりすることになり、注目の場면을読者により長い間多角的に印象づける効果を生む<sup>(2)</sup>。芸能の『仮名手本忠臣蔵』を写した草双紙は他にもあるので、それらと比較をすれば、当代の人々にとっての忠臣蔵の受容のみならず、こうした草双紙の表現の特質が浮かび上がることだろう。

## ●前編上巻

二丁裏・三丁表：〔図8〕



図8 二丁裏・三丁表

（絵） 大序、いわゆる「鶴岡兜改」。八幡宮で直義を迎える高師直、饗応役の塩谷判官と桃井若狭助。師直と対立する若狭助を判官が収める。

（文） 大序。冒頭こそ「いまはむかし、こゝに」と草双紙らしく始まるが、それ以後は、<sup>あしかゞせうぐんたかうちこうにつ</sup>「足利将軍尊氏公新田

(1) 例えば山東京山『室育婿の入船』（文化十一年（1814）刊）に読者が描かれ、「親子打より一ぺん絵を見てしまい」、そして字が読めるようになった姉が読み上げていくと説明されている。

(2) 津田真弓「疱瘡絵本『雛鶴笹湯寿』考」（『国語国文』78-7、二〇〇九年七月）など。

よしさだ うちほろぼ みやこ ごしよ かまへ とくふう よ も あまね ばんみんくさ こと なび  
 義貞を討亡し、都に御所を構へ徳風四方に普く、万民草の如くに靡  
 きたが りん せい くに は つる おか まんぐう そうえいじやうじゆ ごだい  
 き、従ふ御威勢、国に羽をのす鶴が岡八幡宮御造営成就し、御代  
 さん ごしやていあしかゞ ひやう 衆のかみなをよしこう かまくら げ ちやく  
 参として御舍弟足利左兵衛督直義公、鎌倉に下着」と、浄瑠璃の  
 本文をほぼそのまま利用して文を構成している。「若狭之助が存ず  
 るには、<sup>たかうちこう</sup>尊氏公の」まで。

### 三丁裏・四丁表：〔図9〕



図9 三丁裏・四丁表

(絵) 大序。顔世御前に言い寄ろうとする師直。とまどう顔世御前。

(文) 大序「鶴岡兜改」の続き、師直が顔世の袂に入れた恋文を「物を<sup>もの</sup>も言<sup>い</sup>はで<sup>な</sup>投げ返せば、<sup>かへ</sup>もろなを<sup>もん</sup>」まで。

### 四丁裏・五丁表：〔図10〕



図10 四丁裏・五丁表

(絵) 二段目、いわゆる「力弥使者」。塩冶判官家臣大星由良助の息子力弥が、使者として桃井若狭之助の館を訪れる。婚約者の力弥を迎える加古川本蔵の娘の小浪。小浪の義母・戸無瀬が衝立に身を隠して様子を見ている。

(文) 大序の続きと、二段目冒頭の文句「空<sup>そら</sup>も弥生<sup>やよひ</sup>の黄昏時<sup>たそがれどき</sup>」から、大星力弥と小浪のくだり「互<sup>たが</sup>いの胸<sup>むね</sup>に恋人<sup>こひびと</sup>と。物<sup>もの</sup>も得言<sup>えい</sup>はぬ赤面<sup>せきめん</sup>は。梅<sup>うめ</sup>と桜<sup>さくら</sup>のはな<sup>はな</sup>ず<sup>ず</sup>まふまくら<sup>まふまくら</sup>花相撲枕<sup>はなまぐら</sup>の」まで。

五丁裏・六丁表：〔図11〕



図11 五丁裏・六丁表

(絵) 二段目、いわゆる「松切り」。師直を討つつもりだと明かす桃井若狭之助に、家老の加古川本蔵は松の片枝を切り捨てて、意志を見せる。

(文) 二段目「力弥使者」の続きと「松切り」。若狭之助が本蔵と二人きりになった後の、本蔵の金打きんちょう(かねうち、口頭で誓約する時に金属類を打ち合

わせる)、若狭之助が思いを語る部分を削除し、「縁先えんさきの松まつの片枝かたえだ、ずつぱと切つて手ばしかく鞆さやに納め、サア殿にはまづ此通りに遊ばせ―」と本蔵の松切りの場面につないでいる。続いて三段目、いわゆる「進物」。冒頭の「足利左兵衛督直義公あしかがさひやうぎのかみただよしこう、関八州くわんぱうしゅうの管領くわんれいと」から、師直主従が顔世に恋文を出したことを話す「主従しうへうなづき話し合ふ折しもあをり」まで。

六丁裏・七丁表：〔図12〕



図12 六丁裏・七丁表

(絵) 中央に大きく、二段目最後の戸無瀬の制止を振り切って師直の館へ向かおうとする加古川本蔵を描く。背後にやや小さく鷺坂伴内に贈答の金品を渡す本蔵を描く。想像図というところか。

(文) 三段目「進物」の続きと、いわゆる「泥鰌踏みかんどのなに」。おかるの「勘平殿は何してぞ、どうぞあいたい用ようがあると」まで。

## 七丁裏・八丁表：〔図13〕



図13 七丁裏・八丁表

(絵) 三段目「泥鰯踏み」、顔世御前の腰元・おかるに鷺坂伴内が言い寄ろうとする。そこへやってくる塩谷判官の家臣でおかると恋仲の早野勘平。

(文) 三段目「泥鰯踏み」の続きと、いわゆる「館騒動」の前段部分。御殿で師直が若狭之助に愛想を言い立てる、「<sup>と</sup>かくいくゑ<sup>ゑ</sup> <sup>あやま</sup> <sup>ばん</sup>「兎角幾重にも誤りへ。伴内」まで。

## 八丁裏・九丁表：〔図14〕



図14 八丁裏・九丁表

(絵) 三段目「進物」、桃井若狭助にひれ伏して詫げる師直と、従者伴内。

(文) 三段目「館騒動」の続き。師直が腹立ち紛れに判官へ雑言を浴びせる、「<sup>おくがた</sup> <sup>ていちよ</sup>「奥方は貞女といひ、<sup>きりやう</sup>器量といひ、<sup>しゆせき</sup>手跡は見事、<sup>ごじまん</sup>御自慢なされ、むつとなされな嘘はないはさ、<sup>うそ</sup> <sup>こん</sup>今」まで。

## 九丁裏・十丁表：〔図15〕



図15 九丁裏・十丁表

(絵) 三段目「館騒動」。顔世御前からの返歌に怒りが募り、そのはけ口を塩谷判官に向ける師直。耐えかねた判官は刀を抜いて師直を斬ろうとする。

(文) 三段目「館騒動」の続き。しかし、芝居の見せ場である師直の暴言と判官とのやりとりは省略し、すぐに「<sup>あくこう</sup> <sup>はんぐわんはら</sup> <sup>す</sup>さまへ」の悪口に判官腹に据へか

ねて、<sup>ぬ</sup>抜き<sup>う</sup>打ちに<sup>ま</sup>真つ向へ<sup>こう</sup>斬り<sup>き</sup>つける」とする。続いていわゆる「裏門」、さらに四段目、いわゆる「花籠」の部分。判官の上屋敷、<sup>おく</sup>「奥は媚く」まで。

十丁裏：〔図16〕



図16 十丁裏

(絵) 三段目「裏門」。主君塩谷判官の大事に居合わせなかった勘平が、切腹しようとするが、おかるにとめられる。鷺坂伴内が行く手をはばもうとする。

(文) 四段目「花籠」の続き。「無調法なる<sup>がう</sup>郷<sup>え</sup>右<sup>も</sup>衛<sup>ん</sup>門<sup>かんじん</sup>」ヤア肝心な事申し上<sup>ふてうほう</sup>ん。今日」まで。卷末の署名、「芳虎画」,  
<sup>こんにち</sup>「長嶋主人著」。

●前編下巻

十一丁表：〔図17〕



図17 十一丁表

(絵) 四段目「花籠」。鎌倉・扇ヶ谷、塩谷判官の屋敷。顔世御前が閉門を命ぜられた判官の心を慰めようと、八重桜を活けている。側に控える大星力弥。

(文) 四段目「花籠」の続き。口論する家老の斧九太夫と諸士頭<sup>し</sup>の原郷右衛門<sup>い</sup>と、顔世御前。「御上使のお入りと  
いひいるれば」まで。

## 十一丁裏・十二丁表：〔図18〕



図18 十一丁裏・十二丁表

- (絵) 四段目「花籠」。塩谷判官の屋敷。  
九太夫・郷右衛門・顔世。
- (文) 四段目、いわゆる「判官切腹」の部分。上使が来て塩谷判官と問答。切腹する判官、駆け込む大星由良助。  
「我も満足まんぞく―。定めて無念むねんきい聞たである。エ、無念むねん。くち口」まで。

## 十二丁裏・十三丁表：〔図19〕



図19 十二丁裏・十三丁表

- (絵) 四段目「判官切腹」。塩谷判官の屋敷。幕府からの上使、石堂右馬之丞・薬師寺次郎左衛門を迎える、塩谷判官と原郷右衛門。
- (文) 四段目「判官切腹」に続き、いわゆる「評定」。あしかば「足利の討手うつてを待請まちうけ、討死けっと一ツ決」まで。

## 十三丁裏・十四丁表：〔図20〕



図20 十三丁裏・十四丁表

- (絵) 四段目「判官切腹」。塩谷判官の屋敷。切腹する判官と駆けつける大星由良之助。舞台では、息絶える前になんとか駆けつけた由良之助に、判官が自分の無念を晴らすよう形見として切腹に使った小刀を託すが、この図では切腹前に由良之助が居る。
- (文) 四段目「評定」の続きと「城明け渡し」、さらに五段目「鷹たかは死ししても

穂は摘まず」の冒頭から、いわゆる「鉄砲渡し」の早野勘平と千崎弥五郎が出会う部分。「殿の御供先、我が不運にてその場に居あはせずお屋敷へは帰られず」まで。

十四丁裏・十五丁表：〔図21〕



図21 十四丁裏・十五丁表

(絵) 四段目「城明け渡し」。城明け渡しの日、大星由良助が判官の形見の刀を取り出し、力弥や家臣の原郷右衛門、片山源右衛門、大鷲伝吾に見せる。

(文) 五段目「鉄砲渡し」の続き、「与市兵衛とお尋ねあれば、知れ」まで。

十五丁裏・十六丁表：〔図22〕



図22 十五丁裏・十六丁表

(絵) 五段目「鉄砲渡し」。千崎弥五郎に火を借りようとする早野勘平。

(文) 五段目、いわゆる「二つ玉」と、六段目「身売り」。六段目の冒頭を少し省略し「山崎のごき小百姓せう。与市兵衛がはにう埴生の住家すみかから、京都祇園の一文屋が「与市兵衛殿うちにかと言ひつゝ」まで。

十六丁裏・十七丁表：〔図23〕

(絵) 右枠内は、五段目「二つ玉」。おかるの父親与市兵衛から財布を奪い取ろうとする斧九太夫の息子定九郎。左に大きく、猪を狙って撃った勘平の鉄砲に撃ち抜かれる定九郎とその様子を見る勘平。(銃弾に倒れた定九郎図には、誤って「定五郎」と書かれている)



図23 十六丁裏・十七丁表

- (文) 六段目、いわゆる「身売り」。「親爺<sup>おやぢ</sup>殿<sup>どの</sup>がかの五十両といふ金<sup>かね</sup>を。手拭<sup>てぬぐひ</sup>ひにぐるゝと巻<sup>ま</sup>いて懷<sup>ふところ</sup>に入<sup>いれ</sup>らるゝ、ゆへ俺<sup>おれ</sup>が着<sup>き</sup>てゐる」まで。

十七丁裏・十八丁表：〔図24〕



図24 十七丁裏・十八丁表

- (絵) 六段目「身売り」。遊女になることが決まったおかるを、祇園町の一文字屋が駕籠に載せて連れていこうようとしているところへ、勘平が戻る。
- (文) 六段目「身売り」の続きと、いわゆる「勘平切腹」。「親爺<sup>おやぢ</sup>を殺<sup>ころ</sup>したな、イヤ、それは、と」まで。

十八丁裏・十九丁表：〔図25〕



図25 十八丁裏・十九丁表

- (絵) 六段目「身売り」。おかるの母おかや、財布の話聞き内心自分の罪に驚く勘平、鏡台の前で泣くおかる。
- (文) 六段目「勘平切腹」の続き、「エゝ、勘平<sup>かん</sup>早<sup>はや</sup>まりしと」まで。

十九丁裏・二十丁表：〔図26〕



図26 十九丁裏・二十丁表

- (絵) 六段目「勘平切腹」。切腹してしま  
わの際の勘平に、一味の連判状に血  
判を押させる原郷右衛門。
- (文) 六段目「勘平切腹」の続き、「刀の  
き きき のんど つ た  
切つ先、咽に突き立て、かつば」ま  
で。

二十丁裏：〔図27〕



図27 二十丁裏

- (絵) 七段目、いわゆる「祇園一力茶屋」。  
塩谷判官の家老だった斧九太夫が師  
直家来の鷺坂伴内と共に祇園一力茶  
屋に現れる。迎える一力茶屋の亭主。
- (文) 六段目、「勘平切腹」の続き、最後  
まで。詞章の他に、絵の説明として  
「○<sup>ぎ</sup>祇園<sup>おん</sup>町<sup>まち</sup>一<sup>いち</sup>力<sup>りき</sup>の<sup>あげ</sup>揚<sup>や</sup>屋<sup>ば</sup>の<sup>ば</sup>場」と書か  
れている。巻末署名、「長島主人編  
輯」、「一猛齋芳虎画」。

●後編上巻

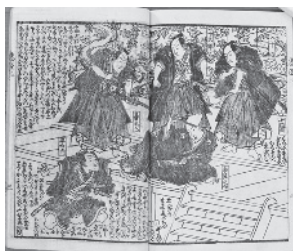


図28 二丁裏・三丁表

二丁裏・三丁表：〔図28〕

- (絵) 七段目「祇園一力茶屋」。矢間十太  
郎、小野寺十内、竹森喜多八の三人  
が一力茶屋で酒を飲む大星由良之助  
を訪ねる。由良之助の様子に怒る三  
人と寺岡平右衛門。
- (文) 七段目、「祇園一力茶屋」。冒頭の

「花<sup>はな</sup>に遊<sup>あそ</sup>ば、祇園<sup>ぎおん</sup>あたりの色揃<sup>いろそろ</sup>へ」から、鷺坂坂内と斧九太夫の会  
話「拙者<sup>せつしや</sup>に罷<sup>まか</sup>り登<sup>のぼ</sup>りて、心得<sup>こころえ</sup>ぬ」まで。

三丁裏・四丁表：〔図29〕



図29 三丁裏・四丁表

(絵) 七段目「祇園一力茶屋」。顔世御前  
からの密書を由良之助に渡す力弥。

(文) 七段目「祇園一力茶屋」の続き、平  
右衛門に言葉を返す由良之助「我<sup>われ</sup>ら  
知<sup>ち</sup>行<sup>ぎやう</sup>千五百石、貴様<sup>きさま</sup>と」まで。

四丁裏・五丁表：〔図30〕



図30 四丁裏・五丁表

(絵) 七段目「祇園一力茶屋」。判官の速  
夜にもかかわらず、由良之助に断つ  
べき魚肉類を酒の肴としてすすめる  
九太夫。

(文) 七段目「祇園一力茶屋」の続き、蛸  
を斧九太夫に勧められる由良之助の  
「俺<sup>おれ</sup>が浪人<sup>らうにん</sup>したも判官<sup>はんぐわんのど</sup>殿<sup>どの</sup>の無分別<sup>むふんべつ</sup>か  
ら。恨<sup>うら</sup>みこそ」まで。

五丁裏・六丁表：〔図31〕



図31 五丁裏・六丁表

- (絵) 七段目「祇園一力茶屋」。伴内の前で、九太夫がしてみせる駕籠抜け。駕籠に乗り帰ったふりをして、一力屋にとどまり、由良之助から密書を盗むために床下に隠れる。
- (文) 七段目「祇園一力茶屋」の続き、大星由良之助とおかるの会話、梯を見つけて「いや――<sup>さいわ</sup>幸いこゝに九つ」まで。

六丁裏・七丁表：〔図32〕



図32 六丁裏・七丁表

- (絵) 七段目「祇園一力茶屋」。妹のおか  
るを斬ろうと刀を抜く寺岡平右衛門。  
許しを請うおかる。
- (文) 七段目「祇園一力茶屋」の続き、お  
かると平右衛門の会話、「親、夫に<sup>おや おつと</sup>  
<sup>あは おも</sup>逢ふと思ふが、わしや<sup>たの</sup>楽しみと、聞<sup>き</sup>  
くより平右衛門、<sup>ぬ</sup>抜き」まで。

七丁裏・八丁表：〔図33〕



図33 七丁裏・八丁表

- (繪) 七段目「祇園一力茶屋」。平右衛門は床下から九太夫を引きずり出す。刀持つ由良之助、それを見る十太郎、十内、喜太八、おかる。
- (文) 七段目「祇園一力茶屋」の続き、由良之助の「コリヤ平右エ門。最前鎗さいぜんさびがたな わすなぶ刀を忘れたは、こやつを颯なぶりと殺しと

いふ<sup>し</sup>知らせ。命<sup>いのち</sup>取らずと苦痛<sup>くつう</sup>させよ」まで。

八丁裏・九丁表：〔図34〕



図34 八丁裏・九丁表

(絵) 八段目、いわゆる「道行旅路の嫁入」。東海道を旅する加古川本蔵の娘小浪と義母戸無瀬。背景に富士山。

(文) 七段目「祇園一力茶屋」に続き、八段目「道行旅路の嫁入」。道行き文を使わず、小浪と義母が婚約者力弥一家のいる山科の隠れ家に行くとして簡単に説明している。さらに九段目。

いわゆる「雪転し」の部分は削除し、

「山科閑居」につなぐ。戸無瀬と小浪の訪問に、由良之助の妻お石の「云号<sup>いいなづけ</sup>いたした折<sup>をり</sup>は」まで。

九丁裏・十丁表：〔図35〕



図35 九丁裏・十丁表

(絵) 九段目「山科閑居」。大星の隠れ家。花嫁衣装を着ている小浪と戸無瀬、それに対するお石。お石は小浪と力弥の婚姻を拒む。

(文) 九段目「山科閑居」の続き、お石の「思<sup>おも</sup>ひ詰<sup>つめ</sup>た戸無瀬様の心底<sup>となせさま</sup>、小浪殿<sup>しんてい</sup>の貞女<sup>なみどの</sup>。志<sup>てい</sup>が<sup>こころざし</sup>」まで。

十丁裏：〔図36〕



図36 十丁裏

(絵) 九段目「山科閑居」。戸無瀬が小浪を斬るために刀を引き抜く。

(文) 九段目「山科閑居」の続き、外にいる虚無僧(本蔵)の「<sup>か</sup>古川<sup>ほん</sup>本蔵の<sup>くび</sup>首<sup>しん</sup>進上<sup>うけ</sup>申す。お受」まで。卷末署名、「長島主人輯録」, 背景の唐紙に「孟齋画」の文字。

●後編下巻

十一丁表：〔図37〕



図37 十一丁表

(絵) 九段目「山科閑居」。雪の中、天蓋(笠)をかぶった加古川本蔵が尺八を吹きながら大星の家に現れる。

(文) 九段目「山科閑居」の続き、力弥が<sup>りき</sup>槍を本蔵に突き通す前の部分、「力<sup>や</sup>弥<sup>こぶし</sup>は拳をためらひて本蔵が」まで。

十一丁裏・十二丁表：〔図38〕



図38 十一丁裏・十二丁表

(絵) 九段目「山科閑居」。本蔵が三宝を踏み散らす。その周りに戸無瀬, 小浪, お石。

(文) 九段目「山科閑居」の続き、瀕死の本蔵の「昔より今にいたるまで唐と<sup>むかし</sup>日本<sup>いま</sup>に<sup>から</sup>たつた二人, その一人を」まで。

## 十二丁裏・十三丁表：〔図39〕



図39 十二丁裏・十三丁表

(絵) 九段目「山科閑居」。口論となり本蔵に戦いを挑むもかなわないお石。力弥が母親を守るため本蔵を槍で突く。

(文) 九段目「山科閑居」の続き、最後の「ねや 閨の契は一夜ちぎりぎり、心残して立ちとよ出こゝろのこけり」まで。

## 十三丁裏・十四丁表：〔図40〕



図40 十三丁裏・十四丁表

(絵) 九段目「山科閑居」。画面中央、大由良之助と力弥が、本蔵が贈った師直の屋敷の図面を見て相談している。見守るお石。その背後、血まみれとなり息絶えそうな本蔵に泣く戸無瀬と小浪。

(文) 十段目、いわゆる「人形まわし」。天河屋義平の店を訪ねる舅の太田了竹、「一つの相談さうだん」まで。

## 十四丁裏・十五丁表：〔図41〕



図41 十四丁裏・十五丁表

(絵) 十段目「人形まわし」。摂津堺にある廻船問屋の天河屋。天河屋義平は舅の太田了竹の要求に応え、妻おそのの離縁状を書く。後ろに丁稚の伊五が義平の息子由松を背負っている。

(文) 十段目「人形まわし」に続き、いわゆる「天河屋」。「由良之助は義平にゆらのすけ

むか  
向ひ、さてへ」まで。

十五丁裏・十六丁表：〔図42〕



図42 十五丁裏・十六丁表

(絵) 十段目「天河屋」。義平のもとに捕り手が襲来して、大星たちの武器を隠している長持を開けよという場面。要求を断る義平。由松も捕まえられている。由良之助の命令で浪士一味が義平の忠誠を試すための芝居である。

(文) 十段目「天河屋」の続き、家にこっそり戻るおそのと店の伊五との会話、「ヲ、犬になりと噛まれて死んだら、  
いま おも ある おれ(ママ) 去られた」まで。

十六丁裏・十七丁表：〔図43〕



図43 十六丁裏・十七丁表

(絵) 十段目「天河屋」。義平の家の外。二人の黒装束の男が義平女房おそのの島田髷を切り取り、懷の離縁状も奪っていく。

(文) 十段目「天河屋」の続き、由良之助に礼物を差し出されて顔色を変える義平、「町人と侮りこの金子、イヤ我へは」まで。

## 十七丁裏・十八丁表：〔図44〕



図44 十七丁裏・十八丁表

(絵) 十段目「天河屋」。由良之助の礼物は、金ではなく、おそのの髪や櫛笄、離縁状だった。由良之助の策略で、おそのの父が決めた結婚を拒むことができ、感謝する義平とおその。由良之助の後ろに角野九平次と近松官六。

(文) 十段目「天河屋」、文章を省略して、義平と由良之助達の別れ。続いて十一段目、いわゆる「討入り」の部分。冒頭の詞章を省いて、「いろはにほへとと立ち並ぶ」と面々を紹介。寺岡平右衛門が館を探し回る「師直が行方、勝手しれず、寝間とおぼ」まで。

## 十八丁裏・十九丁表：〔図45〕



図45 十八丁裏・十九丁表

(絵) 十一段目「討入り」。高師直の屋敷の戦い。竹森喜太八と矢間十太郎が高師直を捕まえる。それを見守る由良之助。

(文) 十一段目「討入り」の続き、師直の首を取り、塩谷判官の位牌に手向け「御一人づ、御焼香、まづまづ総大将なれば」まで。

十九丁裏・二十丁表：〔図46〕



図46 十九丁裏・二十丁表

(絵) 塩谷判官の墓前。師直の首が供えられ、一同が焼香する。画面中央奥に討ち入りの連判状を持つ大星由良之助。右回りに、塩田政之丞、不破勝右衛門、磯合十郎右衛門、大星清左衛門、堀江易兵衛、岡崎八十右衛門、岡本琴右衛門、赤服延蔵、横川官兵衛、大星力弥。中央で焼香する竹森

喜太八と、墓前に師直の首と、判官形見の刀を持つ矢間十太郎。師直の首はこの刀で切り落とされ、また彼が師直を生け捕りにした功績で一番に焼香をしたことを示している。絵に関しては、いわゆる十一段目の「光明寺焼香」のように描く。

(文) 十一段目「討入り」の続き、二番目の焼香に早野勘平を指名する由良之助の「その時の勘平が心さぞ無念にあらふ、口惜し」まで。

二十丁裏：〔図47〕



図47 二十丁裏

(絵) 帆を下ろした六艘の船と夕焼け。空に雁が飛ぶ。泉岳寺のある高輪あたり、品川の海の風景。

(文) 十一段目「討入り」の続き、桃井若狭之助の助け船、襲いかかる鷺坂坂内を返り討ち。最後はやや浄瑠璃本文を変え「これもひとへに君が代の久しき例し武士の鑑こそはなりにける。めでたし――」と、草双紙らしく結んでいる。巻末署名、「長嶋主人輯録」、「一猛齋芳虎画」。

付記：

なお、フィンランド本の由来については、サロマー氏作成のカタログによれば (Salomaa 1994, pp 81-82.), ヤポニカコレクションの573『大日本国全図』に「H. F. Antell, Nagasaki 1877」と加筆があることから、美術収集家の Herman Frithiof Antell 旧蔵の可能性もある。またヘルシンキ大学の言語学教授であった Otto Donner と中国研究者 Hugo Lund の旧蔵という可能性も指摘されており、後考を俟ちたい。

謝辞：

本ワークショップとセミナーの実現、本稿の作成には多くの方のご協力を賜った。ヤポニカコレクションにつきお世話になったフィンランド国立図書館古典コレクション専門司書のミカ・ハッカライネン (Mika Hakkarainen) 氏、テロ・サロマー (Tero Salomaa) 氏に、くずし字セミナー開催でお世話になった畑有紀氏 (現、新潟大学日本酒学センター特任助教)、ヘルシンキ大学日本語学代表のリーッカ・ランシサルミ (Riikka Länsisalmi) 准教授、同スタッフの匠瑳佐知子講師に、フィンランドとノルウェイでのくずし字セミナー協同開催にご尽力くださったオスロ大学人文・社会科学図書館員のマグスセン・矢部直美氏、2017年にヤポニカコレクションの報告書を書いてくださった EAJRS Conservation/Preservation Working Group advisor 安江明夫氏に、本稿掲載図版を佐賀県立図書館で撮影をくださった村上義明氏、改印につきご教示くださった岩切友里子氏、英語タイトルにつきご教示くださったトーヴェ・ビュールク氏に、また資料掲載を許可下さった所蔵機関に、心より感謝申し上げる。

ヘルシンキ大学における「くずし字セミナー」は、日本学術振興会「国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業」の「西欧の日本学研究者とのネットワークを通じた日本人若手研究者の国際化－絵写本・版本研究を中心として」(JPMXS05J2900001) の成果の一部である。また、日本近世文学会の後援を受けた。